

〔野菜〕

1. 果菜類

1) イチゴ

品種動向: 促成栽培では、福岡は「あまおう」、佐賀・大分・鹿児島は「さがほのか」、長崎は「さちのか」、
「ゆめのか」、熊本は「さがほのか」、「紅ほっぺ」および「ひのしずく」、宮崎は「さがほのか」、「章姫」、「やよい
ひめ」および「紅ほっぺ」が主要品種。長崎で「ゆめのか」、熊本で「紅ほっぺ」の作付けがやや増加傾向で
ある。宮崎における四季成り品種は「みやざきなつはるか」。各県ともに新品種に対する期待は大きく、育種
を急いでいる。

促成栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島）:[平成 25 年定植]9 月上旬は平年より気温が
やや低く推移し、花芽分化が平年より早かった。定植後の高温により収穫開始は早かったものの、年内はや
や小玉傾向となり収量はやや少なかった。12~2 月の低温により生育は鈍化し、第 1 時腋果房(2 果房)の収
穫も遅れ、収量も伸び悩んだ。3 月中旬以降は、気温上昇により出荷量が増加し、最終的な収量は平年並
みとなった。佐賀では単収は過去最高となった。単価は昨年同様に高めに推移した。炭疽病、うどんこ病、
ハダニの発生はやや多かった。佐賀では CO₂ 施用が増加し、また、パッケージセンターの活用や不耕起栽
培の普及が進んだ。長崎では天敵導入が進んだ。宮崎では CO₂ 局所施用や CO₂ によるハダニ防除の取り
組みが始まっている。

2) トマト

品種動向: 品種に大きな動きは見られないものの、福岡では黄化葉巻病抵抗性品種の導入、佐賀では
多様化の動きがある。「麗容」、「CF 桃太郎はるか」、「感激 73」、「りんか 409」等が促成および抑制栽培用の
主要品種。夏秋栽培用としては、「りんか 409」、「みそら 64」。

促成栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄）:[25 年定植]沖縄を含め台風の被害
もなく、定植時期から天候に恵まれ、初期生育はほぼ順調で、年内出荷量はほぼ前年並み。1~2 月に低温
による果実の着果不況、着色不良が見られた。4 月以降は高温で推移し、平年並みの出荷量であった。全
体としては、黄化葉巻病の発生が前年よりやや多く、大分県では灰色かび病、宮崎では灰色かび病、葉か
び病、コナジラミ類が多く発生した。鹿児島では青枯れ病や褐色根腐れ病が発生した。

普通栽培（熊本、大分、宮崎）: 定植後の冷え込みで初期生育は遅れたが、その後天候に恵まれ生育は
回復し、出荷量は平年並みからやや増。熊本では梅雨の長雨、8 月の日照不足により軟化玉や成り疲れが
一部にみられたが、前年と比べて出荷量は多く、単価は安かった。すすかび病と青枯病の発生がみられた。

3) ナス

品種動向: 促成栽培用の主要品種は「筑陽」。単為結果性品種「省太」が福岡で、「あのみり」が鹿児島
で導入されている。早熟・普通栽培用としては、熊本で「筑陽」、「ヒゴムラサキ」、「黒紫大長」等。

促成栽培（福岡、佐賀、熊本、鹿児島、沖縄）:[25 年定植]福岡では 11 月以降の低温により 9~12 月の
出荷量は少なかったが、1 月以降は日射量が多く気温も平年並みで、出荷量は 1~5 月は前年並み、6 月は
大幅増となり、総出荷量も前年よりやや増。福岡に続き、佐賀でも CO₂ 施用が試みられている。単価は前年
並み。虫害ではアザミウマ類の発生が目立ち、特に沖縄では防除が難しくなってきた。福岡、佐賀、熊本で
はスワルフスキーカブリダニやタバコカスミカメムシ等の天敵導入の取り組みが進められている。青枯病、す
すかび病、灰色かび病の発生がみられた。

早熟・普通栽培（熊本）: 定植時後の冷え込みで前半はやや生育が遅れたが、その後天候に恵まれ、生
育は順調であった。8 月の曇天により比較的低温に推移したため、草勢の低下も少なく、果実肥大、着色と
も良好で、出荷量は前年を上回り、単価は前年並みであった。青枯病、すすかび病およびアザミウマ類が発
生した。

4) ピーマン

品種動向: 促成栽培の主要品種は、宮崎では「みやざきグリーン」、「京鈴」、「京ゆたか」、鹿児島では
「TM 鈴波」、「京鈴」、沖縄では「ちぐさ」。早熟・普通作型では、熊本は「京まつり」、「さらら」、「みおぎ」、大
分は「さらら」、宮崎は「京まつり」、「みやこグリーン」が栽培されている。

促成栽培(宮崎、鹿児島、沖縄):[25年定植]宮崎では10月の高温や台風接近によるハウス内の環境不良により一部で生育が遅れた。11月は草勢の低下により心どまり傾向の圃場が多く、2~3月は全般に気温が低めに推移したため、果実の肥大が遅れ気味であった。4月以降、全体的に過繁茂になり、白果の発生がみられた。病害虫では、全体をとおしてアザミウマ類、アブラムシ、2月にはネクトリアの発生がみられた。この他に、斑点病、菌核病が発生した。鹿児島では燃油高騰対策として、ヒートポンプ導入が進んでいる。4~5月は草勢低下により出荷量は少なめに推移し、赤果や腐敗果の発生が見られた。沖縄では栽培の前進化が図られており、年内出荷量が増えた。

早熟・普通栽培(熊本、大分、宮崎):熊本では定植後の冷え込みでやや生育が遅れたが、それ以降は天候に恵まれて生育は順調で、出荷量は前年並みであった。大分ではうどんこ病の発生が多かったが、高温障害の発生も無く、生育は順調であった。宮崎では定植後の曇雨天により草勢は弱く、初期収穫量は少なかった。梅雨明け後は、高温の影響により、尻腐れ果、日焼け果、赤果の発生が多くなった。台風により茎葉損傷、収量および品質の低下がみられた。病害虫ではアザミウマ類やアブラムシ、うどんこ病や炭疽病、青枯病、一部の圃場では黒枯病や斑点病の発生がみられた。

5)キュウリ

品種動向:同じ作型であっても、県、さらに産地により多様な品種が栽培されている。褐斑病抵抗性品種の導入が進んできた。促成栽培用品種としては「極光 607」、「輝世紀」、「千秀 2号」、「ハイグリーン」、ステータス系、アルファ系など。早熟・普通栽培では「ステータス夏」、「ちなつ」、「ビュースター」他が、抑制栽培では「ゆうみ 637」、「極光 607」、「エクセレント 620」、「輝世紀」、アルファ系やステータス系(熊本)他が、利用されている。沖縄では、促成から抑制作型まで「輝世紀」および「エクセレント 353」が主要品種。

促成・半促成栽培(福岡、佐賀、長崎、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄):[25年定植]定植後の生育は順調。全般に1~2月に低温の影響で生育の遅れ、収量低下がみられた。3月以降は天候に恵まれ、生育は回復し、収量も増加したが、総収量は前年をやや下回った。単価は前年よりやや高。佐賀ではCO₂施用やIPMの導入が進められている、宮崎ではキュウリ黄化えそ病の発生が平年より多く、べと病、褐斑病、アザミウマ類、コナジラミ類の発生がみられた。

早熟・普通栽培(福岡、熊本、宮崎、沖縄):全般に梅雨の長雨、8月の曇天により、草勢低下が見られ、収量は平年よりやや少なかった。単価は前年よりやや高かった。沖縄では黄化えそ病の発生が多かった。

抑制栽培(福岡、佐賀、熊本、沖縄):天候に恵まれ、定植後の生育は順調。熊本では昨年並みの収量であったが、福岡、佐賀では増加した。福岡で緑斑モザイク病の多発、沖縄では黄化えそ病の発生がみられた。

キュウリ退緑黄化病や黄化えそ病の対策(天敵スワルスキーカブリダニの導入、0.4mm目合いの防虫ネット展開、UVカットフィルムの展開等)が、全地域、全作型で定着してきた。

6)スイカ

品種動向:促成・半促成および抑制作型用の大玉主要品種は、「祭りばやし 777」、「春のだんらん」、小玉は「マダーボール」、「ひとりじめ 7」。早熟・普通作型用の品種は、鹿児島では「夏太鼓」、沖縄では「朝ひかり SR」、「富士光 TR」。長崎ではイチゴ後作に黒小玉スイカ「ひとりじめ bonbon」が昨年並みに栽培された。

促成・半促成栽培(長崎、熊本、鹿児島、沖縄):[25年定植]熊本では12月の冷え込みにより定植後の初期生育がやや遅れたが、1月から天候に恵まれ、3月以降から順調に生育し、着果も安定した。果実肥大、品質も良好で、出荷量は前年並みで単価もほぼ平年並み。沖縄では冬季の曇天により着果不良、空洞果の発生が見られたが、前年より発生は少なく、収量は前年よりやや増であった。虫害はハダニ、コナジラミ、アザミウマ類が、病害は熊本でうどんこ病が発生した。

早熟・普通栽培(鹿児島・沖縄):鹿児島では5月下旬から曇雨天の影響で交配時期が遅れ、果実肥大も遅く、出荷も遅れた。出荷量は平年より少なく、単価も低迷した。沖縄では灰白色斑紋病、うるみ果の発生、収穫期の台風襲来で生産量が減少した。

抑制栽培(熊本、沖縄):熊本では定植後から天候に恵まれ生育は順調であった。その後も着果、果実肥

大とも良好で、出荷量、単価とも前年よりやや高めであった。

7)メロン

品種動向:「アンデス」、「クインシー」、「肥後グリーン」、「アールス雅」系、「アールスセイヌ」系、「アールスベネチア」系の多様な品種が、産地・作型毎に展開している。宮崎の早熟・普通栽培では「パパイヤ」、「アリス」。品種の変動はほとんどない。

促成・半促成栽培(熊本):[25年定植]12月の冷え込みにより、初期生育がやや遅れたが、年明けから天候に恵まれ、3月以降から順調に生育し、着果も安定した。4月は小玉の割合が多くなり、5月からは果実肥大、品質も良好で、前年より出荷量はやや減、単価はやや高となった。

抑制栽培(熊本):定植後は天候に恵まれ生育は順調であった。年内にかけても天候に恵まれ、着果も安定して、果実肥大、品質とも良好で、前年より出荷量はやや減、単価はやや高く推移した。

病害として、いずれの作型においても、退緑黄化病、つる割病、うどんこ病の発生がみられた。

8)カボチャ

品種動向:「えびす」、「くりゆたか」の他、「くりほまれ」、「栗将軍」、「ニュー黒皮」、「坊ちゃん」。

促成・半促成栽培(熊本、鹿児島、沖縄):[25年定植]熊本では1月に冷え込んだが、天候に恵まれ、生育は順調。着果も安定して良く、果実肥大も良好であった。鹿児島では生育は順調、単収も平年を上回り、単価も高めで推移した。沖縄(南部)では12月下旬~1月上旬、低温で着果不良が目立った。平年より水入りカボチャがやや多かったが、病害虫が少なく天候に恵まれ、生産は良好であった。防風垣設置や低温時の着果安定対策をとっている。

早熟栽培(鹿児島):4月上旬に霜害を受けたが、生育はほぼ順調で、単収も平年を上回り、単価も高めで推移した。生産者の高齢化と前作の不作の影響で作付面積は2割減少した。

抑制栽培(長崎、熊本、鹿児島):長崎では播種、定植期の長雨により作業が遅れ、果実肥大期の少雨による肥大不良で小玉生産となった。熊本では天候に恵まれ、着果も安定して、果実肥大、品質とも良好であった。一方、鹿児島では10月の2回の台風の影響により、茎葉の損傷が大きく、着果不良、着果遅れ株が発生。果実は全体的に小玉で、収量は激減、でん粉蓄積の劣る果実が多かった。単価は出荷量が少なかつたため、平年より高単価で推移した。

いずれの作型、産地においても、うどんこ病が広く蔓延。疫病、アザミウマ、アブラムシによる被害がみられた。鹿児島では天敵温存と防風対策としてソルゴーの栽植を推進している。

9)ニガウリ

品種動向:「えらぶ」(長崎、熊本、宮崎、鹿児島)の他、宮崎では「佐土原3号」、「パワフルレイシ」、「宮崎つやみどり」、鹿児島では「か交5号」、「チャンピオン」が栽培されている。沖縄では「汐風」(抑制、促成、半促成)、「群星」、「夏盛」(早熟・普通:施設)、「島風」(早熟・露地:露地)。品種の変動は小さい。

促成・半促成栽培(長崎、熊本、鹿児島、沖縄):[25年定植]長崎では収穫期の天候不順で収量は減。面積も減少傾向。熊本では2月に冷え込んだが、3月以降から天候に恵まれ生育は順調で、出荷量は前年よりやや増。鹿児島では低温で収穫開始が遅れ、収量も昨年より少なかった。沖縄では定植後の台風襲来や冬場の低温により作柄が安定していない。風対策技術確立が必要。

早熟・普通栽培(熊本、宮崎、鹿児島、沖縄):宮崎では曇雨天の影響で着果数減、草勢低下がみられ、うどんこ病、斑点病、斑点細菌病が散見された。鹿児島では9月は台風の影響で曇天が続き、10月の収量が少なかった。沖縄では生育は順調で、収量は平年並み。インゲン、キュウリ、キク等の後作として作付けを推進している。

抑制栽培(熊本、鹿児島、沖縄):鹿児島では9月は台風の影響で曇天が続き、10月の収量が少なかった。沖縄(北部)では夏期に定植して年末まで収穫する短期栽培で、台風対策として補強パイプハウスではハウスごと防風ネットを被覆している。台風リスクが高く積極的に推進していない。秋の台風で植え替えを要した圃場もあった。

うどんこ病、アザミウマ、アブラムシ、センチュウ被害がみられた。熊本ではつる割病が発生しており、新土佐台木を導入している。

10) サヤインゲン

品種動向:「ベストクroppキセラ」、「ビックリジャンボ」、「サーベル」等。なお、沖縄では半つる性「ケンタッキブルー」を中心に栽培。わい性インゲン(サーベル)では長期収穫に取り組む農家が増えている。

促成・半促成栽培(熊本、鹿児島):[25年播種]熊本、鹿児島ともに作柄は平年並み。鹿児島では一部に根腐病や萎凋病が発生。沖縄では10月上旬の台風襲来による作付けの遅れ、11~12月の出荷量の減少、1月以降から菌核病やダニ類の被害はあったものの、3~4月は順調に推移し、全体としては前年作より2割程度増加。

早熟・普通栽培(鹿児島、沖縄):鹿児島では生育、出荷量とも平年並み。沖縄(南部)では9~10月播種は台風被害による播き直しがあった。台風対策を行った圃場では無事収穫が迎えられ単価も高めであった。3~4月は気温上昇により、シーズン通して最も出荷量が多かった。台風接近時のべたがけ被覆と台風通過後の除塩対策が必要。

抑制栽培(鹿児島、沖縄):鹿児島では播種後、長雨日照不足さらに台風の影響により生育不良となり、生育・出荷量とも平年の60%程度であった。沖縄では11月播種は低温の影響で初期生育や収穫開始が遅れる傾向があり、さらに今期は冬季に降雨が少なく、灌漑設備のない平張り栽培圃場では伸長が遅かった。

アザミウマ、マメハモグリバエの発生が多く、その他病虫害として、うどんこ病(熊本)、菌核病(鹿児島、沖縄)、チャノホコリダニ等の発生がみられた。

11) ソラマメ(鹿児島)

品種動向:主要品種は「陵西一寸」、「ハウス陵西」、「唐比の春」。品種は替わらず。

夏まき栽培:生育初期(9~10月)の台風被害で欠株が多かった。11月以降が冷涼であったため年内の収量は平年より多かった。天候不良(曇雨天多)により収量は平年よりやや少なかった。炭疽病が発生した。アザミウマ類に対して、IPM防除技術確立。

12) エンドウ(鹿児島)

品種動向:「ニムラサラダスナップ」が主要品種。他に「スーパーグリーン」、「あくねグリーン」、「南海緑」。特に動きはない。

秋まき栽培:実エンドウは、生育初期が高温のため、下節位の着莢が悪く、枝の伸長が早かった。3月以降が冷涼であったため、収量は平年よりやや多かった。スナップエンドウも同様に、収量は平年よりやや多かった。アザミウマ類の発生が多く、莢に白ぶくれ症が多かった。

夏まき栽培:スナップエンドウは、10月の台風被害で欠株が多かった。初期生育不良や天候不良(曇雨天多)により収量は平年より非常に少なかった。

病虫害として、アザミウマ類、褐紋病、褐斑病の被害がみられた。アザミウマ類に対して、IPM防除技術確立。

13) オクラ

品種動向:主要品種は「ブルースカイ(G,Z)」、「ニュースカイ」、「ピークファイブ」、「ガリバー」他。

促成・半促成栽培(鹿児島):[25年播種]生育初期の低温で欠株が多かった。収穫期に曇雨天が多く、灰色かび病の発生が多かった。収量は平年より非常に少なかった。

早熟・普通栽培(熊本、宮崎、鹿児島、沖縄):熊本では早い作型で播種、定植時期に冷え込みがみられ、初期生育が遅れ、7月上旬の豪雨の影響で出荷量は前年より少なかった。8月は例年になく曇天が続き、寡日照となり、その後は天候に恵まれたが、出荷量は前年より少なく、単価は高かった。宮崎では生育は平年並み。鹿児島では生育初期の低温で欠株が多かった。収穫期に曇雨天が多く、灰色かび病の発生が多かった。台風被害により減収し、収量は平年より非常に少なかった。

沖縄(中部)では、排水対策等の徹底により、苗立枯性病害の被害は減少したが、一部の圃場では降雨後の雨水の停滞により多発した。また、5月、10月と収穫適期に台風の襲来があり、生産量はかなり減少した。苗立枯病、疫病の発生、オオタバコガの食害など課題が多かった。

2. 葉根菜類

1) アスパラガス

品種動向:「ウエルカム」。品種の動きはほとんどない。

半促成栽培(福岡、佐賀、長崎、熊本):北部九州各県ともに、前年秋の高温や日照不足の影響で、春芽の収穫量は前年より少なかった。立茎は順調に行われ、夏芽の収量は前年を上回った。全期間の収量は、佐賀では過去最高を記録した前年比 95%となり、単価はやや高かったことで前年に近い生産額となった。

茎枯病の他、斑点性病害(斑点病・褐斑病)、アザミウマ、ダニ、ハスモンヨトウの発生がみられた。夏季の高温対策として、寒冷紗被覆が推進されている。

2) ネギ

(1) コネギ

品種動向:産地、季節に応じて使い分けて周年栽培。福岡の周年栽培では「FDH」と「冬彦」が 2 大品種、佐賀では「鴨頭」、「冬彦」。大分では「若殿」が主で、「冬彦」、「ストレート」など耐倒伏性品種を導入。

周年栽培(福岡、佐賀):福岡では 4~6 月どりは順調であったが、7~10 月どりは曇天続きによる生育遅れや収穫物の品質低下(重量軽、軟弱)がみられた。11~12 月どりは順調で、1~3 月どりは曇天の影響で軟弱なネギが多くみられ、前年をやや下回った。佐賀もほぼ同様。

秋まき栽培(大分):[25 年播種]生育は順調であった。

冬まき栽培(大分):生育は順調であった。

春まき栽培(大分):生育は良好であった。

夏まき栽培(大分):8 月が平年より低温で推移したため生育は順調で、出荷量は平年より多かった。

ネギハモグリバエ、アザミウマ、また根腐萎凋病およびボトリチス菌による葉先枯れの発生がみられた。虫害抑制のため、UV カットフィルムの導入が拡大。

(2) ネギ

品種動向:主要品種は「羽緑一本太」、「龍まさり」、「春扇」、「羽一本太」、「夏扇 4 号」、「龍翔」等で、作型・産地(標高)に応じて使い分け。

夏まき栽培(大分、鹿児島):[25 年播種]大分では順調な生育で、収量は平年並み。鹿児島では 10 月の台風襲来で定植直後の圃場では被害がみられ、生存株数がやや減少したが、その後の生育は順調であった。

秋まき栽培(大分):[25 年播種]順調に経過し、収量は平年並み。

冬まき栽培(大分、鹿児島):[25 年播種]大分では夏期低温で経過したことから収量は平年を上回った。鹿児島では 7~8 月は平年よりも気温がやや低く、日照時間が短かったが、土壌の乾燥程度は小さく、生育は概ね順調に推移した。耐暑性と耐寒性に優れる「夏の宝山」の普及が拡大。夏季昇温抑制技術の検討を進めている。

春まき栽培(大分):夏期低温で経過したことから収量は平年を上回った。

軟腐病、萎凋病、白絹病の発生がみられた。

3) タマネギ

品種動向:早出し用として「貴錦」、「レクスター 1 号」、「スパート」、普通用として「ターザン」、「もみじ(3 号)」他が、作型に合わせて栽培されている。沖縄では「F1037」。

秋まき(早出し)栽培(佐賀、長崎、宮崎):佐賀では 9 月中・下旬の平均気温が平年より 3~4℃ 高くなり発芽率がやや低下した。10~12 月に天候不順で播種・定植準備が遅れた。1 月末からべと病の発生がみられ、4 月以降急激に拡大した。長崎では生育環境は良く、収量も高かった。宮崎では平年並みの生育。なお、佐賀では全自動定植機の利用率は 4 割を超えた。

秋まき(普通)栽培(佐賀、長崎、鹿児島、沖縄):佐賀では 10~12 月に天候不順で播種・定植準備が遅れ、年内定植率は 80%程度となった。べと病の発生がみられ、4 月以降急激に拡大した。長崎では球肥大期の気象条件に恵まれ、生産は安定。鹿児島では天候に恵まれ、生育は順調で、平年より多収傾向。沖縄(宮古)ではセット球を用いたトンネル栽培が行われている。セット球の 10-11 月定植では、初期生育は順調

であったが、1月に低温、寡日照の影響で肥大が遅れ、腐敗球や分球が多かった。苗の9～10月定植では低温により抽苔が目立った。

病虫害として、べと病、灰色腐敗病、アザミウマ類の発生がみられた。

4) ニラ(大分)

主要品種は「タフボーイ」、「スーパーグリーンベルト」、「ミラクルグリーンベルト」。

半促成栽培(冬ニラ):2月の低温と春先の低温で生育が遅れ、春先の出荷量が低下した。低温伸長性の高い品種を模索中。白斑葉枯病の発生がみられた。

普通栽培(夏ニラ):比較的低温で経過したため、生育が順調で、前年より出荷量は伸びた。葉先枯れ症、アザミウマが発生した。

5) レタス

品種動向:産地、作型に対応し、「ツララ」、「ステディー」他。佐賀では「サウザー」、「ステディー」が業務用として周年用いられる。沖縄では秋まき用に「ラブトル」、冬まき用に「グリーンストーン」が栽培されている。

秋まき栽培(佐賀、長崎、鹿児島、沖縄):佐賀では生育後半の寒暖の差が激しく、生育がばらついた。長崎では高温、干ばつ等の影響で発芽不良、定植遅れ等がみられ、早出しでは夜蛾類被害、生理障害等も発生。11月以降は生産は安定した。鹿児島では作柄は平年並みであった。沖縄(南部)では台風の影響で定植準備が遅れ、前年より収穫開始期が若干遅れたものの、全体の生産量はやや増加した。

冬まき栽培(佐賀、沖縄):佐賀では寒暖の差が激しく、生育がばらついた。沖縄(南部)では台湾シロガシラの被害が多く発生したものの、生育は概ね順調であった。

夏まき栽培(佐賀):9月の長雨で定植が遅れ、秋口以降は高温で生育が進み、収穫時期が前進した。

病虫害被害の発生は少なく、軟腐病が認められた程度。沖縄の台湾シロガシラ対策として、防鳥ネットが講じられている。

6) ホウレンソウ(佐賀、鹿児島)

産地、作型によりきわめて多数の品種が栽培される。秋・冬まき用として佐賀では「ハンター」、「トラッド7」、「ソロモン」、宮崎では「サプライズ7」、「クロノス」、「スーパーアリーナ7」、春・夏まき用として「プリウス」、「ニュー進太郎」、「ミラージュ」、「マジェスタ」他。

ホウレンソウは栽培期間が短く、また集約的に栽培されることから、気候の影響を受けにくい。いずれの産地、作型においてもほぼ順調な生育であった。ただし、佐賀の26年春まきでは、順調な生育であったが、6月以降は日照不足の影響で軟弱な生育となった。夏まきでは、8月は台風、連続した曇雨天・日照不足により軟弱徒長したため、収量が減少した。9月以降は順調な生育で推移し、収量も前年より多くなった。

佐賀ではケナガコナダニと萎凋病、宮崎では冬まきで一部に炭疽病の発生がみられた。

7) ハクサイ(長崎)

主要品種は「春物語」、「春眉山」。

冬・春まき栽培では、12月後半からの低温により抽台が懸念されたが、肥培管理により抽台の発生は少なく、また心腐れの発生も少なく、大玉生産となった。軟腐病、心腐症菌核病による被害が発生した。

8) キャベツ

品種動向:産地、作型により多様な品種が栽培される。佐賀の秋まきおよび冬・春まき栽培では「T-532」、「夢舞台」、「錦秋」、「さつき王」、また、鹿児島の秋まき栽培では「金春」、「輝岬」、「初恋」が、沖縄では「はやどり」、「ビューティボール」が栽培された。夏まき栽培では「いろどり」、「松波」、「夢舞台」、「夢ごろも」、「金春」等。

秋まき栽培(佐賀、鹿児島、沖縄):[25年播種]いずれの地域でも概して生育は順調で、平年並み。沖縄(北部)では育苗に失敗する農家が多く(発芽率が悪い)、作付けの遅れや面積減少により計画比50%程度の出荷となった。シロガシラによる被害もみられた。佐賀では水田裏作物として推進中であり、有望品種の選定が進められている。鹿児島では畦内施肥が一部で採用されている。

冬・春まき栽培(佐賀):生育は順調に生育した。しかし、6月にネギアザミウマの被害が多発した。

夏まき栽培(佐賀、鹿児島):佐賀では夏場は長雨だったことから定植が遅れた。秋口からは高温で生育

が進み、年末年始にかけて前倒しで出荷を行ったため、1月中旬以降の収量が少なくなった。鹿児島では年内の生育は平年よりやや遅れ気味であった。1～3月どりの生育は平年並で順調。南薩地域のグリーンボール(アーリーボール)で黒腐病が多発し大幅に減収。

病虫害としては、根こぶ病、菌核病、アザミウマの発生がみられた。

9) ブロッコリー

品種動向:「ピクセル」が広く利用され、他に「グランドーム」、「しき緑 96 号」、「彩麟」など。佐賀では有望品種を選定中。

秋まき栽培・冬春まき(福岡、佐賀):[25年播種]秋季の降雨により定植が遅れ、収穫開始は例年よりやや遅れ、年内の出荷量は平年より少なかった。2月上旬の高温により出荷が集中したが、最終的な出荷量は各地ともに前年並みの作柄。佐賀では水田裏作として作付けを推進。

夏まき栽培(福岡、佐賀、長崎):福岡では夏季の曇天長雨による定植遅れ(10日程度)、初期生育不良があり、年内の出荷量は例年よりやや少なかったものの、1月の多日照で出荷量は回復した。佐賀、長崎もほぼ同様に推移した。

いずれの産地、作型においても根こぶ病の発生が問題である。

10) ダイコン

品種動向:産地、作型によりきわめて多数の品種が栽培される。また、品種の動きも速い。冬まき用として「初蒼」、「春慶」、「早生ながはる」、「春神楽」、春まき用として「つや風」、「トップランナー」、夏まき用として「夏天下」、「夏の守」、秋まき用として「耐病総太」、「冬侍」他。鹿児島の冬・春・夏・秋まきでは内部が白く、総太りの品種が増える傾向。

冬まき栽培(長崎、鹿児島):[25年播種]長崎(島原)では作付面積増。一部で品質低下が見られたものの生産は安定。鹿児島では平年並みの生育。

春まき・夏まき栽培(鹿児島):2月播きの5月どりでは、一部の品種で抽台がみられた。夏まきでは黒斑細菌病が多くみられ、キスジノミハムシの被害も多かった。

秋まき栽培(宮崎、鹿児島):宮崎では周期的な台風の影響で作業遅れや生育遅延がみられた。鹿児島では黒斑細菌病が多くみられ、11月播種では空洞も多かった。

病虫害は、鹿児島では鱗翅目類、そして特に夏・秋まきでキスジノミハムシが、また、横縞症、亀裂褐変症、針状黒変、空洞症などの生理障害の発生がみられた。

11) ニンジン

品種動向:主要品種は「向陽 2 号」、その他「敬紅」、「ベータ 312」、「楽陽」、「黒田五寸」、「朱衣」。沖縄の秋まきでは「TE30」が栽培されている。

秋まき栽培(鹿児島、沖縄):(25年播種)鹿児島では平年並みの生育であった。沖縄(中部)では2月頃から適期を逃した収穫遅れ等が目立ち、全体の出荷量は前年を下回った。

冬まき栽培(長崎):播種期の適度な降雨により発芽、生育とも良好で、収量も平年を上回った。

夏まき栽培(長崎、宮崎、鹿児島):長崎では播種期の降雨により計画播種ができなかったが、病虫害等の発生も少なく、秋まきを含め、概ね良好な生産。宮崎では周期的な台風の影響で作業遅れや種子流亡によるまき直しがみられた。秋期は天候も回復し、生育は良好となった。鹿児島では台風による播種遅れ、苗立ち不良が多くみられた。

12) ゴボウ

品種は「柳川理想」、「山田早生」他。鹿児島では加工用として「常豊」が普及。

秋まき栽培(福岡、宮崎、鹿児島):(25年播種)福岡では8月末～9月播き:8月下旬からの降雨により播種時期が平年に比べて大きく遅れ、また、発芽不良も散見されたため、収穫開始の遅延や生育不良等により低収となった。10月～11月播き:初期生育は順調であったが、2月の冷え込みにより生育が遅れ、根部の生長が不良となり低収。作付面積の減少も含めて生産量は前年比 80%となった。宮崎では早まきでは高温の影響でまき直しがみられたが、生育は順調であった。鹿児島では天候不良により、播種が遅れた圃場は肥大が遅かった。高温・乾燥による発芽不良によるまき直しもあった。

冬まき(宮崎、鹿児島): (25年播種)宮崎では周期的な低温(寒暖差の開き)の影響で生育が遅れた。鹿児島では平年並みの生育であった。増収を目指し、不織布直がけ技術を普及に移した。

春まき栽培(宮崎、鹿児島):宮崎では初期生育は順調であったが、夏場の低日照の影響で肥大遅れがみられた。鹿児島では若掘りゴボウの2~3月播き6~8月どりの栽培が増加。生育は平年並みであった。

病虫害として、黒あざ病(症)、ネモグリバエ、ハスモンヨトウ、コガネムシ。輪作、残渣の撤去、土壌消毒を実施。

13) バレイショ

品種は、「ニシユタカ」、「メーカーイン」、「デジマ」、「トヨシロ」。

秋作抑制・冬作(鹿児島、沖縄):鹿児島では年明け以降、2月および3月上旬は天候不順で出荷は不安定であったが、作柄は良好で大玉傾向であった。単価は平年並み。沖縄(北部)では生育は順調で、出荷量は前年よりやや増加。

春作(長崎、宮崎、鹿児島):長崎では病虫害の発生や霜害等気象災害もなく、平年並みの作柄。宮崎では初期は良好な生育であったが、収穫期に入り曇天が多く、塊茎の肥大不足やでん粉歩留まり低下等がみられた。鹿児島では天候に恵まれ作柄は良好。単価も平年並み。

秋作(長崎、沖縄):長崎では病虫害の発生がみられたが、極端な減収はみられなかった。沖縄(北部)では主産地の国頭地区全体で作付後の種イモの腐れ、強風による茎の折損があり、出荷量は計画比6割程度であった。

病害ではそうか病、疫病、菌核病、軟腐病が発生。長崎ではそうか病抵抗性品種の導入を推進している。

14) サツマイモ

品種は、高糖度品種「ベにはるか」の他に、「ベニサツマ」、「高系14号」、「コガネセンガン」。

早熟・普通栽培(大分、宮崎、鹿児島):大分では平年並みだが、8月の日照不足から充実度が低いものがあった。宮崎では早掘は多収傾向であったが、普通掘は秋期の曇天の影響で1割程度の減収となった。鹿児島では植付後、4~9月の気温が低く、生育初期の降雨が少なく、その後は平年以上の降雨があり、地上部の生育やいもの肥大が不良で、低収傾向であった。

15) サトイモ

品種は、「石川早生」、「大吉」、「大和」他。

早熟・普通栽培(大分、宮崎):大分では平年並みの生育。宮崎では前半は地上部の生育が旺盛。7月以降も浸潤な天候が多く、疫病が多発、減収となった。病虫害として、疫病、軟腐病、ヨトウムシが発生。

16) レンコン(佐賀)

品種は「金澄8号」、「清秀」、「金澄20号」他。台風等の災害による被害もなく、生育は順調であった。病害として、腐敗病が発生した。

(九州沖縄農業研究センター 園芸研究領域長 沖村 誠)